

語り継ごう、 戦時中のできごと

戦後59年が過ぎ、当たり前のように物があふれ、平和で豊かな生活に慣れた私たちは、悲惨だった戦争体験やその傷跡を忘れ去りつつあります。

しかし、過去には徴兵制や学徒勤労動員、食料の配給制、特攻隊、抑留生活など先人たちの計り知れない苦しみと多くの犠牲があったのです。戦争の記憶を風化させることなく次代へ伝え、生命の尊さ、平和の大切さを再認識しなければなりません。

花岡政由さん（故人）とそこご家族、今井正文さんから貴重な体験記をいただきました。

昭和10年兵誌

日本は昭和の初めころより、順に軍国主義の国となり、軍人はもとより、市民も軍事教練が強力に押し進められ、兵士として招集される若者が、連日の如く、国民の歓呼の声に送られ戦場に向かった。昭和10年の春、21才で徴兵検査を受ける年時が来、上諏訪に於い

花岡政由さんはハルピンに於いて終戦を迎え、その後2年間、シベリアでの過酷な抑留生活を体験されました。戦争・抑留による負傷・後遺症を克服し、本年5月に90歳でお亡くなりになりましたが、生前に書かれた手記をご家族よりお借りしました。



花岡政由さん（故人）

ったか、私は同年者四人同じ中隊にて心配もなく、2月23日頃故郷をあとに親類知人との見送りを受けて、両親兄弟と別れをした。それは岡谷駅であった。この時、戦友4人で入隊を喜び、列車に乗り、早、頭の中は星の事であった。それは幼い時から兵隊さんを見ていたからでしょう。無事、広島に集合、その時二・二六の何かの事件があった様に覚えていた。同じ年に平野村が岡谷市になったと思う。

さて、3月1日、寛城子第十大隊第一中隊に無事入隊し、軽機班であった。班長は山本軍曹であり、教育は山口、石橋両上等兵であった。入隊について色々注意もあり、一日一日と軍人らしくなり、軍隊はこういう所かと心に決め、

て合格の印をもらって家に帰った。その時代は合格御目出度うなどと言われ、軍人になれば偉い立場になった事と思いました。

翌11年3月1日に満州国、新京寛城子独立守備歩兵十大隊第一中隊に入隊の通知が来た時、何を考え何を思



24歳頃の花岡さん

8月長女が生まれ、私も親になった責任を感じた。

19年10月3日、富山六十九軍隊に召集入隊し、10月15日釜山港に上陸、同20日孫興県、勝武屯第五国境守備隊に編入され、同夜、黒竜江沿岸の監視哨へと馬そりて出発した。そこは樺太監視哨でした。対岸にはロシア兵が見え、双方とも昼夜銃をかまえての警備でした。寒い暑いもなく、ただ任務を遂行するのみでした。

数か月過ぎたある日、農安分遣隊にて、夜間演習中に右足2か所に貫通銃創を受け、即時モークカにて寛城子に帰り、医務室にて手当てを受け、翌日、新京衛成病院に入院した。4か月間治療を受け、

八割方全快に近い時に関東軍の温泉療養所に転院した。そこは大連の北、鞍山の南、「湯崗子」であった。2か月間温泉療養を受けて

全治し、寛城子の中隊に復帰した。その後、酒保大隊本部に二度三度、中隊にいた期間は短かったと思う。

14年除隊の時、現地に除隊の人もなくさんいた事と思う。

除隊者大勢にて一路郷里へと足は早かった。両親も健康で兄弟皆に出迎えを受けた。本当の喜びを感じた。

16年4月に結婚し、同年12月松本50戦隊に応召、17年7月15日解除。帰宅後は、軍人会の役員その他、指導教育等に専念した。家では増産増産と言われた最中、18年

8月20日、突如全員集合の命令、終戦の放送がある。翌日にはロシア兵が多数来て、武装解除をさせられる。手帳はもちろん紙一枚、鉛筆一本まで没収される。少々の衣類が認められる。厳しい事であった。階級別にされ、私は下士官であったので、最終にセイリンに集結され、貨物列車に押し込まれた。二日間くらい列車は走った。シベリアの何処か不明、森林地帯の中で降ろされる。

9月25日ホルモリン第百五収容所へと国境を渡る時は夜だった。

収容所は急造のバラックが相当数点在していた。夏でもストープをたく寒さであった。零下20度までは分かるがそれ以上の寒さは不明。従って毎日枯れ木を全員で持って帰り、薪とした。一戸当り25名、毛布一枚で体を寄せ合って寝る。手袋や衣服は破れれば巻脚半の糸を抜き、針金を曲げて修繕する。電燈もなく哀れであった。

収容所での作業は大木の伐採でノルマを付された。食事はノルマの達成状態によってA・B・Cと差別があった。Aが大豆、モロコシをふかしたものの、Bはおかゆ、Cは水だけであった。骨と皮だけになっても遂行したのである。食事の量は順次に減っていく。雪が降っても雨が降っても変わりなくノルマが課されたのである。

余りの空腹に拾い集めた^{もみ}稗を食する。胃と腹から血が出て治すのに一苦労。その辺にいる小動物は何でも食べた。それと夏、森の中に発生するキノコを食べた者はすごい幻覚に襲われ苦しみ死に至った。病気になる者には二度と逢う事はなかった。死者の肉を食べた者は銃殺、その防止にロシア兵が厳重な監視体制をとっていたといわれる。

重労働と寒さと空腹で故郷すら忘れる程だった。体力と記憶力、思考力が無くなり、喜怒哀楽がわからず、話もできなかった。

22年7月夢に見た帰還命令がでた。推定で10日間くらいで家に着いたと思うが、今もってどうしてシベリアより帰ってきたのか思い出せない。岡谷駅に着いた時は人目をさげ夜半に帰った。後の話では何十時間も眠り続けたそう。

一か月くらいの静養で歩ける様になったが重度の栄養失調のため35歳で歯が全部抜け落ちてしまった。だが、適切な医者^の診断や家族の手厚い心からの介護のおかげで元気になり、子供にも恵まれ、86歳になりました。

御国のためという義務であった事、苦痛とか無念はもう昔のこととなりました。これからの世の中はみんなが健康で幸せに暮らせることを願っています。

引揚証明書…この証明書で内地通貨の交換や食料配給を受けることができました



引揚証明書…この証明書で内地通貨の交換や食料配給を受けることができました

九死に

一生を二回

昭和12年の夏、日本と中国が上海で衝突し、支那事変が勃発した当時、私は中等学校二年に在学中で軍事教育を強いられており、出征兵士の見送りや留守宅の勤労奉仕の連続で銃後を支えていました。

特に忘れないシヨックは中等学校の軍事教官が7月に召集され、2か月後戦死されたとの連絡を受けたときでした。当初、武漢三鎮攻略の勝ち戦であったのが、戦況熾烈（しりてつ）となっていました。

昭和16年12月8日、大東亜戦争勃発に胸躍り、血走る思いでした。ちょうど軍人志望（海軍少年電



今井正文さん

信兵の県下6名の狭き門を合格して、翌17年9月1日、令状により横須賀第二海兵団に入団し、横須賀海軍通信学校へ入校しました。2か月間の基礎教育は、待ったなしの日課に基づき、教育訓練課授業や手旗・モールス信号の演習、また銃剣術や柔道、剣道、相撲の実習があり、非常につらいものでした。

特にきつかったのが野比海岸でのカタ漕艇競争でした。これに負ければ班長・班員ともに1食抜き、罰則だったので必死でした。

11月15日普通科電信術練習生を命ぜられ、交信班教程、和文、数文字文、欧文のモールス信号を猛勉強しました。一分間に100〜120字の打電を要求され、成績により実施部隊の配置が決まるので命懸けの猛練習の日々でした。手首の反応が器用、不器用によって優劣が決まりました。幸い8か月の教程のところ、7

か月で普通科練習生交信班教程を卒業し、同日、同校海軍通信学校付けを拝命し、7月20日には、兼久里浜第二警備隊付を命ぜら

れました。

昭和19年5月1日、※甲飛第1期電信兵として入校、八十二分隊教員室付けを命ぜられ、教育担当日課に基づき、夜間二時間、校庭海辺の松林に防空壕を掘らせました。軍隊は厳しいところですが、学生は育ち盛りで、だったので夜食を出すこともありました。

教育途中の10月9日、第1次臨時通信術交信特修科を拝命し、80日間の猛特訓を受け、終了と同時に霞ヶ浦航空隊付を命ぜられ、通信隊14分隊に所属になりました。偵察機への搭乗を命

ぜられた時は、初めての事でしたので、揺れる偵察機の中での任務に体が慣れるまでの数日は本当に身に沁みました。

その後は、第1期※甲飛2名の機上通信教育を担当し、敵機の動き等を司令室ほか基地に打電の状況報告の訓練をさせました。

3月1日、第十航空艦隊に編入し、司令部付となりました。霞ヶ浦海軍航空隊練習併合航空総体は海軍中将 松永貞市以下8名の幹部、隊員は228名でした。

霞ヶ浦海軍航空隊の編成と役割

1、電信班 62名 機上・地上 電信



トントントンの電信符号の練習中の甲飛一期練習生 (昭和19年7月頃)

2、暗号班	47名	暗号翻訳
3、甲飛	12名	幹部搭乗指導
4、乙飛	22名	甲飛の指導
受		
5、整備班	13名	飛行機整備
6、有線班	62名	鎮守府ほか連絡
7、主計班	10名	経理、調理、被服

実施部隊にいたので、夜間の当直中も和文・欧文の受信が頻繁で、疲れから眠気に襲われ、緊急電報等を脱落することもありました。同地域には土浦海軍航空隊がありました。学徒動員令による入隊

者や、零戦に乗る夢を見て志願した乙種飛行予科練習生（十四歳）の厳しい訓練基地であり、特攻命令が出ると、我が霞ヶ浦飛行場から必勝の鉢巻姿も凛々しく、片道燃料で爆装の「ゼロ戦」が帽振りに送られ「行きます」と飛び立ち、敵艦に体当たりを敢行した若鷲を幾度も送り、目に焼き付けています。

戦況も不利となった6月10日午前8時、第十艦隊より司令部宛※「作特緊急」電報を受けました。内容はB29爆撃機を含む艦載機多数、目標は霞ヶ浦航空隊、土浦航空隊とのことでした。

すぐに空襲警報となり、8時30分、ダグラスB29超重爆撃機11機の大編隊とアメリカ艦載機グラマンF6Fの波状攻撃を受け、一瞬にして壊滅。破壊された土浦の隊員、実に290人が犠牲となってしまいました。

兵舎防空壕は破壊され、周辺で散華した十代の若鷲練習生は無念の最後を遂げ悲運だった。

幸い私がいた霞ヶ浦航空隊は兵舎二棟の爆破ですみ、広大な飛行場の避難場所があったので228名は難を逃れ無事でした。

私には重要書類（赤本）暗号書10冊を守る責務があり、それらを抱え防空壕に入るや否や、扉を閉めると同時にビビッと大音響がして、兵舎が破壊されており恐ろ

しさを実感しました。これぞ九死に一生を得たのであり、神仏の加護に感謝しました。

当日は副官命令により、土浦航空隊の遺体処理にあたりましたが、相貌の惨状でした。爆撃のために地面は穴だらけになり、人の姿をとどめた遺体はほとんどなかったのです。



基礎教育中の射撃練習（昭和19年6月頃）

山があり、そこには防空壕を備えた仮兵舎があった。内部は二段ベッドになっていましたが、地下水脈が地表近くにあってため、湿気がひどく快適ではありませんでした。

千歳は当時、敵機の飛来も無く平静でした。勤務は三交替制で偵察状況、電探報告受、司令部との交信を行っていました。

一か月が過ぎようとした7月13日、霞ヶ浦への復帰を命ぜられました。

帰路、函館において、直前にP51戦闘機の機銃掃射があり、波状襲撃にて町は破壊されており、多数の犠牲者が出ていました。

やむを得ず昼は山林に避難し、夜を待って町へ下り二日遅れで海軍防衛艦にて青森に着きました。

本隊復帰後は、四国の観音寺特攻基地に派遣されるはずでしたが、青森への到着が遅れたため間に合わず、代行の隊員が派遣されていました。

しかし、しばらくして観音寺特攻基地は爆撃を受け破壊され、代行隊員全員戦死の訃報を聞かされ驚きました。軍隊は「運隊」と聞かされていましたが、紙一重で生死が左右されることをまとも実感し、九死に一生を得ました。

それから奥羽海軍航空隊に一時

転勤を命ぜられ、8月15日、司令部よりの緊急電報を受信し、天皇陛下の玉音により終戦を迎えました。

神風特攻隊で戦死した県出身者90名を刻んだ「神風特別攻撃隊の碑」が善光寺にあります。自衛隊が海外に派遣される今の日本にあって実に複雑な気持ちです。憲法が改定されれば米軍と自衛隊が一体となる懸念があります。戦後59年の日本の安泰は平和憲法の下、先の大戦の犠牲者、悲惨な状況を銘記し、戦争の傷跡を風化させないためにも戦争は絶対にしてはいいけない。



水兵長

二等兵曹

一等兵曹

※甲飛：甲種飛行予科練習生
※「作特緊急」：作戦特別緊急電報